

## 「アブラハムの模範」(ローマ四章一〜二五節)

### 1 旧約の証し

今日は、新約聖書がアブラハムをどのように見ていたか、受けとめていたか、それを確認して、半年にわたる私どものアブラハムを巡る学びの締め括りしたいと思います。と思っています。

旧約聖書の偉人で新約聖書に一番多く名前が出てくるのはモーセです。次にアブラハム、そしてダビデとつづきます。

アブラハムの名前が新約聖書で一番多く出るのは調べてみるとルカによる福音書の方です。使徒書簡で多いのはローマの信徒への手紙とガラテヤの信徒への手紙、そしてヘブライ人への手紙です。

先週取り上げたヘブライ人への手紙は「信仰によって」という言葉で旧約聖書の信仰者たちの生き方をとらえていました(一一章)。アブラハムもサラも「信仰によって」人生の困難と試練とを乗り越えて行ったのです。そしてこの手紙は、彼らの信仰を、とくに神の言葉に従うところに見ていたようです。

今日はローマの信徒への手紙です。ローマの信徒への手紙もガラテヤの信徒への手紙もパウロの手になる、キリスト教信仰の基本が力強く示されている手紙です。新約聖書がアブラハムをどのように見ていたか、受けとめていたか、そのもつとも重要な答えを期待している手紙です。

「信仰によって」という言葉でヘブライの信徒への手紙がアブラハムの生き方を総括したように、パウロもまたアブラハムを「信仰の人」(ガラテヤ三・九)と見ていました。

両者とも「信仰」という観点からアブラハムを見ています。しかし今日の箇所、ローマの信徒への手紙四章は、ヘブライ人の手紙と違って、それよりもっと根本的な意味でアブラハムをとらえています。つまり信仰によって義とされた人として、言い換えれば私どもの救いの道を開いた最初の人としてアブラハムを位置づけ、その信仰を評価しています。

今日の聖書、ローマの信徒への手紙の大きな主題は「律法によって義とされる」というユダヤ人たちの生き方・考え方に反対して、「信仰によって義とされる」(義とされるというのは、一言で言えば救われるということ)生き方・考え方を示すことです。それを人の救いの道として、福音として語り伝えるものです。

パウロはユダヤ人です。彼は小さいときから聖書(旧約)に親しみ、青年時代にはエルサレムで特別に律法を勉強し、その知識、その実践にかけては、誰にも負けないと自負していた人です。まさに「律法による義」の生き方を体現していた、それだけでなく、それを誇りにしていた人です。

その彼が、ご承知のように、復活の主イエスに出会い、回心し、すっかりその生き方を変えてしまった、一八〇度転換してしまった。迫害者が一転して伝道者となって宣教の闘いへと身を投じたのです。彼が真剣に問わざるをえなかったのは律法による義の生き方は正しかったのかということでした。

キリスト者として歩む中でパウロに明らかになってきたのは、律法を行うことによ

って人が救いに至ることはないということでした。律法は人間に対する神の要求ですから、その前に私どもが立つとき、私どもには神の要求と自分の現実との隔たりしか見えない。「律法によっては罪の自覚しか生じない」(三・二〇)のです。そこには裁きの神、恐るべき神しか、見えてこないのです。

復活のイエスに出会って、それ以前と大きく変わったのは、律法の要求を自分の力で満たそうという生き方がパウロからなくなっただけです。そもそも人は律法を完全に守ることはできない。それよりもこう考えるようになったのです。イエスご自身が神を愛し人を愛して律法の要求を完全に満たしてくださったのです。そうして神の義を獲得してくださったのです。問題はイエスにおいて差し出されているままにそれを私の義として受け入れることです。つまり信じることです。信仰による義の道が、救いの道が開かれた。それを知ったユダヤ人パウロには旧約の世界も新しく見えてきていました。律法によって義とされる生き方は、決して旧約聖書の示す生き方ではないということが。むしろ信仰によって義とされる道こそ「律法と預言者によって」(三・二一)、つまり旧約聖書によって立証されていたことです。ユダヤ人が最大の誇りにしていたアブラハムも違って見えてきました。アブラハムは信仰によって義とされる救いの道を開いた人なのです。

## 2 行いでも、割礼でも、律法によってもない

それならアブラハムを、パウロはどのように理解していたのでしょうか。今日の箇所、四章は、次のように「問う」ことから始まっています。

では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか(一節)。

少し分かりにくい文章です(「それでは、肉によるわたしたちの先祖アブラハムの場合については、なんと言ったらよいのか」口語訳)。もっと簡単に、こう言っておきます。「いったい何がアブラハムを義人にしたのか」。

この問いにパウロはこの四章全部を使って答えているのです。その答えは三つの言葉(キイワード)によって、論拠と帰結を添えてなされます。

第一に、パウロは、アブラハムを義人としたのは信仰であって「行い」(二節)ではないと言っています。

第二に、パウロは、アブラハムを義人にしたのは信仰であって「割礼」(九節)ではないと言っています。

そして第三に、パウロは、アブラハムを義人にしたのは信仰であって「律法」(一三節)ではないと言っています。

まとめて言えば、アブラハムを義人としたのは、彼の行いでも、割礼でも、まして律法でもないのです。信仰がアブラハムを義人とした。信仰による義、このキリスト者の生き方はじつにアブラハムから始まるのです。

以上の三つのことをもう少し詳しく確認しておきます。第一に、アブラハムを義としたのは信仰であって、彼の行いではありませんでした(二〜八節)。もちろんアブ

ラハムは、その信仰の行いに欠くことはありませんでした。七五歳で故郷を離れ、神の言葉に従って旅立ったこと、独り子イサクを主の命令によつて献げようとしたこと、これこそ信仰の行いでなくて何でしょうか（ヤコブ二・二二―二二二）。しかしパウロは冷静です。創世記には、「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」（一五・八）とあります。信じたがゆえに義と認められたのです。行いではなかったのです。

このことは後世にも重大な結果をもたらしたのです。なぜならそれによつて、主なる神は、人が何か善い行いをしたからではなく、しなくても、いな不信心な者も義とする神（五節）であることが明らかになったからです。

第二に、アブラハムを義としたのは信仰であつて、割礼ではありませんでした（九―一二節）。ここでもパウロは冷静です。聖書の記述に信頼します。アブラハムが義と認められたのは割礼を受ける前でした。むしろ割礼とは「信仰によつて義とされた印」（二一節）にほかならないのです。

このことも重大な帰結をもたらします。パウロはこう続けています。「こうして彼は、割礼のないままに信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められました」（一一節）。割礼のない者の父、すなわち、異邦人、諸国民にとつても彼は父、すなわち信仰の父となつたのです。

第三に、アブラハムを義としたのは信仰であつて、律法ではありませんでした（一三―一七節前半）。神の、子孫に世界を継がせるとの約束は、律法に基づいてではない、信仰による義に基づいているとパウロは言います。ガラテヤの信徒への手紙ではもつと明確に語っています。つまり律法というのは、アブラハムへの約束より四三〇年も後にできた（ガラテヤ三・一七）、つまりモーセを通して後から入り込んだものです。アブラハムへの約束も、それに基づく彼の信仰の生き方も、律法以前に示されたものです。

ここからも重大な帰結が生じます。つまり律法をもたない人々も、アブラハムの信仰に与りうるのです（一六節）。異邦人も、またアブラハムの信仰に従うとき、約束に与ることができる。信仰による救いから異邦人は排除されていない。すべての国民が救いにあずかるのです。

### 3 無から有を呼び出す神を信ず

こうして考えれば、人を義とするのは、行いでも、割礼でも、律法でもない、ただ信仰による。アブラハムは、私どもの信仰の父、救いの道を開いた人です。それはどのような信仰か、さらに見てみたいと思います。

死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神（「無から有を呼び出される神」口語訳、協会共同訳）を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となつたのです。彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこのようになる」と言われていたとおりに、多くの国民の父となりました。そのころ彼は、およそ百歳になつていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰

は弱まりはしませんでした。彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ神を賛美しました。神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです（一七後半〜二一節）。

ここでパウロが取り上げているのは、私どもも創世記ですでに読んできた、イサクの誕生にまつわることです。神はアブラハムとサラに子を授けると約束します。くり返し約束します。そのようにしてアブラハムを祝福すると。ところが子供が与えられない。それだけではありません。アブラハムもサラも、年齢からしても、到底、子供のできる状態ではなかったのです。

創世記を読んできたことから言いますと、アブラハムが、家で生まれた召し使いエリエゼルを養子にしようしたり、ついには女奴隷ハガルによって子を得たことは、ここでパウロがアブラハムの信仰を最大限の賛辞をもって書いているのとは、少し違った印象をもたざるをえません。つまり、アブラハム、そして妻サラの肉体的な弱さというようなものです。これも、私どもは、ここまでの創世記の学びで、その都度感じたところです。

しかしこう考えることもできるように思います。それはそのような肉体的な弱さをうちに含んだ信仰、その強さであったと。アブラハムは、むしろ神を信じ、神の約束を受けて、あれこれ行います。しかし結局はうまくいかず、あの神の約束にもう一度立ち返ることを余儀なくされます。そのとき、彼のつねに導きとなったのは、やはり神の約束の言葉であったのです。その意味で私には「その信仰は弱まりはしませんでした・・・」という言葉が大切です。信仰が弱まらざるをえない現実の中で、しかし弱まらなかったのです。それがアブラハムの信仰であったとすれば、パウロの記述はその通りなのです。

アブラハム自身、「自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せない」と知っていたとあります。「衰えており」は、口語訳では「死んだ状態であり」と訳されています。

こうした現実をアブラハムは知っていました。認めていました。しかし彼は、その人間の現実を、もう一つの現実、神の約束の現実、神の言葉の現実において見、受けとめていたのです。

アブラハムは自分とサラの衰えた現実において、まさにいわば「無に直面して」（アルトハウス）立っていたのです。たしかに私どもの信仰はいつも不可解、絶望、虚無の前に立たされています。しかしアブラハム以前に、私ども以前に、そうした無の前に立っていたのは、じつに創造者なる神であったのです。

私どもはこの神を信じます。無に直面して立ち、しかも「無から有を呼び出される神」を信じます。私どもの肉体的現実における不可能性に逆らってなお希望し、神を信じ、神に依り頼む。それが「信仰の人」アブラハムが示した信仰です。信仰によって義とされたという言葉は、今日の箇所最後の最後にあるように「わたしたちのためにも記されている」（二四節）のです。このアブラハムの信仰に私どももまた倣うものありたいと思います。